

**[A年] 聖霊降臨節第9主日(2021年7月18日)****【旧約聖書日課】創世記21章9～21節**

<sup>9</sup>サラは、エジプトの女ハガルがアブラハムとの間に産んだ子が、イサクをからかっているのを見て、<sup>10</sup>アブラハムに訴えた。

「あの女とあの子を追い出してください。あの女の息子は、わたくしの子イサクと同じ跡継ぎとなるべきではありません。」

<sup>11</sup>このことはアブラハムを非常に苦しめた。その子も自分の子であったからである。<sup>12</sup>神はアブラハムに言われた。

「あの子供とあの女のことで苦しまなくてもよい。すべてサラが言うことに聞き従いなさい。あなたの子孫はイサクによって伝えられる。<sup>13</sup>しかし、あの女の息子も一つの国民の父とする。彼もあなたの子であるからだ。」

<sup>14</sup>アブラハムは、次の朝早く起き、パンと水の革袋を取ってハガルに与え、背中に負わせて子供を連れ去らせた。ハガルは立ち去り、ベエル・シェバの荒れ野をさまよった。<sup>15</sup>革袋の水が無くなると、彼女は子供を一本の灌木の下に寝かせ、<sup>16</sup>「わたしは子供が死ぬのを見るのは忍びない」と言って、矢の届くほど離れ、子供の方を向いて座り込んだ。彼女は子供の方を向いて座ると、声をあげて泣いた。<sup>17</sup>神は子供の泣き声を聞かれ、天から神の御使いがハガルに呼びかけて言った。

「ハガルよ、どうしたのか。恐れることはない。神はあそこにいる子供の泣き声を聞かれた。<sup>18</sup>立って行って、あの子を抱き上げ、お前の腕でしっかり抱き締めてやりなさい。わたしは、必ずあの子を大きな国民とする。」

<sup>19</sup>神がハガルの目を開かれたので、彼女は水のある井戸を見つけた。彼女は行って革袋に水を満たし、子供に飲ませた。<sup>20</sup>神がその子と共におられたので、その子は成長し、荒れ野に住んで弓を射る者となった。<sup>21</sup>彼がパランの荒れ野に住んでいたとき、母は彼のために妻をエジプトの国から迎えた。

**【使徒書日課】ローマの信徒への手紙9章19～28節**

<sup>19</sup>ところで、あなたは言うでしょう。「ではなぜ、神はなおも人を責められるのだろうか。だれが神の御心に逆らうことができようか」と。<sup>20</sup>人よ、神に口答えするとは、あなたは何者か。造られた物が造った者に、「どうしてわたしをこのように造ったのか」と言えるでしょうか。<sup>21</sup>焼き物師は同じ粘土から、一つを貴いことに用いる器に、一つを貴くないことに用いる器に造る権限があるのでは

ないか。<sup>22</sup>神はその怒りを示し、その力を知らせようとしておられたが、怒りの器として滅びることになっていた者たちを寛大な心で耐え忍ばれたとすれば、<sup>23</sup>それも、憐れみの器として栄光を与えようとして準備しておられた者たちに、御自分の豊かな栄光をお示しになるためであったとすれば、どうでしょう。<sup>24</sup>神はわたしたちを憐れみの器として、ユダヤ人からだけでなく、異邦人の中からも召し出してくださいました。<sup>25</sup>ホセアの書にも、次のように述べられています。

「わたしは、自分の民でない者をわたしの民と呼び、

愛されなかった者を愛された者と呼ぶ。」

<sup>26</sup>『あなたたちは、わたしの民ではない』と言われたその場所で、

彼らは生ける神の子らと呼ばれる。」

<sup>27</sup>また、イザヤはイスラエルについて、叫んでいます。

「たとえイスラエルの子らの数が海辺の砂のようであっても、残りの者が救われる。」

<sup>28</sup>主は地上において完全に、しかも速やかに、言われたことを行われる。」

**【福音書日課】マタイによる福音書8章5～13節**

<sup>5</sup>さて、イエスがカファルナウムに入られると、一人の百人隊長が近づいて来て懇願し、<sup>6</sup>「主よ、わたしの僕が中風で家に寝込んで、ひどく苦しんでいます」と言った。<sup>7</sup>そこでイエスは、「わたしが行って、いやしてあげよう」と言われた。<sup>8</sup>すると、百人隊長は答えた。「主よ、わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕はいやされます。<sup>9</sup>わたしも権威の下にある者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また、部下に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします。」<sup>10</sup>イエスはこれを聞いて感心し、従っていた人々に言われた。「はっきり言っておく。イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない。<sup>11</sup>言うておくが、いつか、東や西から大勢の人が来て、天の国でアブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席に着く。<sup>12</sup>だが、御国の子らは、外の暗闇に追い出される。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」<sup>13</sup>そして、百人隊長に言われた。「帰りなさい。あなたが信じたとおりになるように。」ちょうどそのとき、僕の病気はいやされた。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## 創世記21章9～21節

9 エジプトの女ハガルはアブラハムに子を産んでいたが、サラは、その子が遊び戯れているのを見て、<sup>10</sup>アブラハムに言った。「この女奴隷とその子を追い出してください。この女奴隷の子が、私の子、イサクと並んで跡を継ぐことはなりません。」  
<sup>11</sup>この言葉はアブラハムにとって大変つらいことであった。その子も自分の子だったからである。  
<sup>12</sup>神はアブラハムに言われた。「あの子と女奴隷のことでつらい思いをすることはしない。サラがあなたに言うことは何でも聞いてやりなさい。イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれるからである。  
<sup>13</sup>しかし私は、あの女奴隷の子もまた一つの国民とする。彼もあなたの子孫だからである。」

<sup>14</sup>アブラハムは、朝早く起きて、パンと水の革袋を取ってハガルに与え、肩に負わせ、子どもと共に送り出した。彼女は出て行って、ベエル・シェバの荒れ野をさまよった。<sup>15</sup>革袋の水がなくなると、彼女は子どもを一本の灌木の下に行かせ、<sup>16</sup>自分は矢の届くほど離れた所に行き、彼の方を向いて座った。子どもが死ぬのを見るのは忍びないと思ったからである。彼女は彼の方を向いて座り、声を上げて泣いた。<sup>17</sup>一方、神は子どもの泣き声を聞かれ、神の使いが天からハガルに呼びかけて言った。「ハガルよ、どうしたのか。恐れることはない。神はあそこにいる子どもの泣き声を聞かれた。<sup>18</sup>さあ、子どもを抱え上げ、あなたの手でしっかりと抱き締めてやりなさい。私は彼を大いなる国民とする。」<sup>19</sup>神がハガルの目を開かれたので、彼女は井戸を見つけた。彼女は行って革袋に水を満たし、子どもに飲ませた。<sup>20</sup>神は子どもと共におられ、その子は大きくなって、荒れ野に住み、弓を射る者となった。<sup>21</sup>彼はパランの荒れ野に住み、母はエジプトの地から彼のために妻を迎えた。

## ローマの信徒への手紙9章19～28節

<sup>19</sup>そこで、あなたは言うでしょう。「ではなぜ、神はなおも人を責められるのか。神の御心に誰が逆らうことができようか。」<sup>20</sup>ああ、人よ、神に口答えするとは、あなたは何者か。造られたものが造った者に、「どうして私をこのように造ったのか」と言えるのでしょうか。<sup>21</sup>陶工は、同じ粘土の塊から、一つを貴い器に、一つを卑しい器に作る権限があるのではないか。<sup>22</sup>神が怒りを示し、ご自分

の力を知らせようとしておられたが、滅びることになっていた怒りの器を、大いなる寛容をもって耐え忍ばれたとすれば、どうでしょうか。<sup>23</sup>それも、栄光を与えようと準備しておられた憐れみの器に対して、ご自分の豊かな栄光を知らせてくださるためであったとすれば、どうでしょうか。<sup>24</sup>神は、私たちをこのような者として、ユダヤ人からだけでなく、異邦人からも召し出してくださいました。<sup>25</sup>ホセアの書でも、言われているとおりです。

「私はわが民ではない者をわが民と呼び  
愛されなかった女を愛された女と呼ぶ。」

<sup>26</sup>『あなたがたはわが民ではない』

と彼らに言われたその場所で  
彼らは『生ける神の子ら』と呼ばれる。」

<sup>27</sup>また、イザヤはイスラエルについて、こう叫んでいます。

「たとえイスラエルの子らの数が  
海辺の砂のようであっても  
残りの者だけが救われる。」

<sup>28</sup>主は、御言葉を完全に、しかも速やかに  
地上で成し遂げるからだ。」

## マタイによる福音書8章5～13節

<sup>5</sup>さて、イエスがカファルナウムに入られると、一人の百人隊長が近寄り、懇願して、<sup>6</sup>「主よ、私の子〔別訳→僕〕が麻痺を起こし、家で倒れてひどく苦しんでいます」と言った。<sup>7</sup>そこでイエスは、「私が行って、癒してあげよう」と言われた。<sup>8</sup>すると、百人隊長は答えた。「主よ、私はあなたをわが家〔直訳→私の屋根の下〕にお迎えてできるような者ではありません。ただ、お言葉をください。そうすれば、私の子は癒されます。<sup>9</sup>私も権威の下にある人間ですが、私の下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また、僕に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします。」<sup>10</sup>イエスはこれを聞いて驚き、付いて来ていた人々に言われた。「よく言うておく。イスラエルの中でさえ、これほどの信仰を見たことがない。<sup>11</sup>言うておくが、東から西から大勢の人が来て、天の国でアブラハム、イサク、ヤコブと一緒に宴会の席に着く。<sup>12</sup>しかし、御国の子らは、外の暗闇に放り出され、そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」<sup>13</sup>そして、百人隊長に言われた。「行きなさい。あなたが信じたとおりになるように。」ちょうどその時、その子は癒された。

**黙想のためのノート****次主日教会暦と聖書日課について**

・7月18日「聖霊降臨節第9主日」の日課主題は「異邦人の救い」。旧約日課は、「創世記」から、イサクの誕生に続いて、アブラハムが妻サラの女奴隷ハガルに生ませたイシュマエルに対する神のご計画を描く場面。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、イスラエルの選びに関する問いに対して、神の自由な選びということをして「器を作る陶工のたとえ」を用いて説く箇所。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、「山上の説教」を終えられて山を降りカファルナウムの町に入られた主イエスを待ち構えるようにしていた百人隊長が自分の僕の病の癒しを求めて主イエスに願いを訴える逸話。

・「聖書」において「異邦人」の問題は、単純ではない。「新約」の背景にあるユダヤ人社会は、「血筋としてのユダヤ人」+「異邦人であったが律法遵守を誓った改宗者」を「ユダヤ人」の原則としながら、「律法遵守」の基準から外れる者は「異邦人」と同等とみなすという共通理解があった。すなわち、「ユダヤ人」の枠組みを規定するものとして「律法」を位置づけ、それ以外の者を「異邦人」として排除するという考え方が一般的であった。このような考え方は、前5世紀以降、「エルサレム神殿」と「律法と預言者」を基軸としたユダヤ宗教共同体の歴史の中で強化されてきたものと考えられるが、正典としての「律法と預言者」自体がそのような「ユダヤ人・異邦人」観を基軸にしているとは必ずしも言えない。そこに描き出される理想としての「イスラエル」は、歴史的な継代継承という現実を認めながらも、それに甘んじない、各世代ごとに繰り返し更新される「契約の民」としての純粋性が強調されており、「イザヤ書」をはじめとする「預言書」は、終末的預言としていわゆる異邦人がエルサレムでイスラエルに合流するという最終目標を隠さず告げるのである。そのような思想は、遡って「族長伝承」や「出エジプト伝承」の描写にも反映されたと考えられる。すなわち、「族長伝承」では、アブラハム・イサク・ヤコブという系統を「イスラエル」の基軸としながら、傍流となったイシュマエル、エサウなどに対する神の扱いを「排除」としてではなく「同格の別扱い」として描いている。また、「出エジプト伝承」でも、ヤコブの十二部族を祖とする者たちとして「ヘブライ人」を位置づけながら、過越しを経てモーセに導かれてエジプトを去りシナイ山の契約に向かう集団には、「そのほか、種々雑多な人々もこれに加わった」(出 12:38)ことが付け加えられ、契約の民としてのイスラエルがそもそも、民族的純血主義によらない集団として描かれているのである。「新約」の教会は、このような「イスラエル」観を「旧約」の中から掘り起こし、主イエスの教えや活動の中に見いだしていったと考えることができるだろう。そこに至るまでの葛藤は、使徒言行録やパウロ書簡から推察される。

**旧約日課(創世記 21 章より)**

・「創世記」は、正典「律法」の第一巻で、「原初史」および「族長伝承」によって構成されている。そこに描かれているのは、正典編纂時代のユダヤ人にとっての固有の祖先たちの物語というよりは、オリエント世界に広く共有されていたセム族系諸民族にとっての起源伝承の集成であったと考えられる。実際、「アブラハム」は、アラブ系諸部族でも自分たちの祖として認識されてきた。

・日課箇所は、アブラハム族長物語の中でもクライマックスと言える 21~22 章の中に置かれている。ここでは、アブラハム物語で一貫して中心主題であった「跡継ぎ」問題に対しての神の最終解答として正妻サラとの間に誕生した「イサク」に対する扱いが問われている。神の「約束の子」として誕生した「イサク」によって、すべてが丸く収まったわけではない。「イシュマエル」の存在は、イサクの母サラからすれば「イサク」の競合相手であり、排除すべき対象とみなされたが、アブラハムからすれば「イサク」と対等な価値のあるものであり、両立させるべき対象であった。このような矛盾した価値観に基づく葛藤は、人間社会においては普遍的な課題として生じてくることである。これに対して物語が示すのは、神の約束に基づく原則的な立場(「イサク」も「イシュマエル」も!)と、決断を促す神への信頼(「…苦しなくてよい。すべてサラが言うことに聞き従いなさい」という二つの軸である。この二つの軸を両立させる道を行くことが、物語全体でアブラハムに求められてきたこととして描かれているのである。

**使徒書日課(ローマ 9 章より)**

・「ローマの信徒への手紙」は、パウロが未訪のローマ教会に宛てて、自らの訪問計画を伝え、その後のスペイン伝道への協力を求めて記した書簡。ローマ教会は、すでにユダヤ人と異邦人の混合教会として発展していたと考えられるが、パウロは、自らの「異邦人伝道」について聖書に基づく神学的論拠を提示することによって、ローマ教会の人々に自分の新たな異邦人(スペイン)伝道の計画に積極的に参加してもらうことを企図して、やや長大な論を展開している。パウロは、これを基本的には「律法論」として論じていると見ることができるが、パウロが「律法(ノモス)」の用語で論じるものの中には、旧約における「教え/律法(トラー)」という広義の「律法」と、「法(ミシュパト)」「掟」「戒め」など諸規定を指す狭義の「律法」の双方が含まれ、議論が一部混乱している。

・日課箇所でもパウロが取り上げている陶工(焼き物師)のたとえは、預言者イザヤやエレミヤが用いている(イザヤ 29:16、45:9、64:7、エレミヤ 18 章など)。創造主としての神をたとえているが、創造における神の自由という視点と共に、選り用いすることにおける神の自由という視点も、このたとえの中で示されている。

## 福音書日課(マタイ 8 章より)

・日課箇所は、「百人隊長の僕の癒し」の逸話で、ルカおよびヨハネ福音書でも伝えられている。カファルナウムは、ガリラヤ湖北辺の港町で、漁港として栄え、水産加工場もあったと考えられる町。交易路上に位置する重要な町と位置づけられていたと考えられ、ローマ軍が駐屯していた。ルカ福音書は、ここに登場する百人隊長がユダヤ人社会で信頼を得た人物であったことを伝えている一方で、この百人隊長が自ら主イエスのもとに出向いて依頼したのではなく、ユダヤ人たちが間に立って取り次いだと伝えている(ルカ 7:1 以下)。ルカは、マタイ以上に、百人隊長の主イエスという権威に対する謙虚な態度を強調しようとしている。

・日課箇所の焦点は、「権威(エクスーシア)」に対する態度と「信仰」の相関関係という点にある。「エクスーシア」の語義は、前週資料「聖書と祈りの会 210707」で説明したとおり。軍人が軍隊組織という「権威」関係の中に置かれているように、信仰は「天の父」と「その子」という「権威」関係の中に身を置くこととされている。

## 来週の誕生日 (7月18日~24日)

## 主日礼拝の讃美歌から

- ・21-12 番「とうときわが神よ」(= I 16「いとよきみかみよ」)は、17-18 世紀ドイツの敬虔派牧師クラッセルト(クラッセリウス)の作詞。曲は、もともと別の歌詞につけられていたが、1704 年出版の敬虔派讃美歌集でクラッセルトの歌詞と組み合わせられたもので、以後、広く歌われるようになった。J.S.バッハは、クラッセルトの歌詞に自作の旋律をつけている。
- ・21-105 番「ガリラヤの村を」(= 61、115)は、19 世紀英国の国教会司祭からユニテリアンに転じた神学者ストップフォード・ブルックが福音書の「こどもを祝福するキリスト」に即して作詞。曲は、20 世紀前半英国教会の教会音楽家としてエルガーの後任の王室音楽家も務めたヘンリー・デーヴィスが自らの指導する学生グループに作曲させたもの。
- ・21-443 番「冠も天の座も」( I 124「みくにもも宝座をも」)は、19 世紀英国教会司祭の娘エミリー・エリオットが、父の牧する聖マルコ教会の聖歌隊のために作詞、1870 年発行の讃美歌集に採用され、英米で広く歌われるようになった。曲は、別の讃美歌集に採用されるに際して、この歌詞のためにマシューズが作曲。

## 21-12「とうときわが神よ」

## Dir, dir, o Höchster, will ich singen

1. Dir, dir, o Höchster, will ich singen, / denn wo ist doch ein solcher Gott wie du? / Dir will ich meine Lieder bringen; / ach gib mir deines Geistes Kraft dazu, / daß ich es tu im Namen Jesu Christ, / so wie es dir durch ihn gefällig ist.
2. Zieh mich, o Vater, zu dem Sohne, / damit dein Sohn mich wieder zieh zu dir; / dein Geist in meinem Herzen wohne / und meine Sinne und Verstand regier, / daß ich den Frieden Gottes schmeck und fühl / und dir darob im Herzen sing und spiel.

3. Verleih mir, Höchster, solche Güte, / so wird gewiß mein Singen recht getan; / so klingt es schön in meinem Liede, / und ich bet dich im Geist und Wahrheit an; / so hebt dein Geist mein Herz zu dir empor, / daß ich dir Psalmen sing im höhern Chor.
4. Denn der kann mich bei dir vertreten / mit Seufzern, die ganz unaussprechlich sind; / der lehret mich recht gläubig beten, / gibt Zeugnis meinem Geist, daß ich dein Kind / und ein Miterbe Jesu Christi sei, / daher ich »Abba, lieber Vater!« schrei.
5. Was mich dein Geist selbst bitten lehret, / das ist nach deinem Willen eingerichtet / und wird gewiß von dir erhört, / weil es im Namen deines Sohns geschicht, / durch welchen ich dein Kind und Erbe bin / und nehme von dir Gnad um Gnade hin.
6. Wohl mir, daß ich dies Zeugnis habe! / Drum bin ich voller Trost und Freudigkeit / und weiß, daß alle gute Gabe, / die ich von dir verlanget jederzeit, / die gibst du und tust überschwenglich mehr, / als ich verstehe, bitte und begehre.
7. Wohl mir, ich bitt in Jesu Namen, / der mich zu deiner Rechten selbst vertritt, / in ihm ist alles Ja und Amen, / was ich von dir im Geist und Glauben bitt. / Wohl mir, Lob dir jetzt und in Ewigkeit, / daß du mir schenkest solche Seligkeit.

## 21-105「ガリラヤの村を」

## It fell upon a summer day

1. It fell upon a summer day, / when Jesus walked in Galilee, / the mothers from a village brought / their children to his knee.
2. He took them in his arms, and laid / his hands on each remembered head; / "Allow these little ones to come / to me," he gently said.
3. "Forbid them not; unless ye bear / the childlike heart your hearts within, / unto my kingdom ye may come, / but may not enter in."
4. My Lord, I fain would enter there; / O let me follow thee, and share / thy meek and lowly heart, and be / freed from all worldly care.
5. O happy thus to live and move, / and sweet this world, where I shall find / God's beauty everywhere, his love, / his good in humankind.
6. Then, Father, grant this childlike heart, / that I may come to Christ, and feel / his hands on me in blessing laid, / lovingly, strong to heal.

## 21-443「冠も天の座も」

## Thou didst leave Thy throne

1. Thou didst leave thy throne / And thy kingly crown / When thou camest to earth for me, / But in Bethlehem's home / Was there found no room / For thy holy nativity: / O come to my heart, Lord Jesus; / There is room in my heart for thee.
2. Heaven's arches rang / When the angels sang, / Proclaiming thy royal degree; / But of lowly birth Didst thou come to earth, / And in great humility: / O come to my heart, Lord Jesus, / There is room in my heart for thee.
3. The foxes found rest / And the birds their nest / In the shade of the forest tree; / But thy couch was the sod, / O thou Son of God, / In the deserts of Galilee: / O come to my heart, Lord Jesus, / There is room in my heart for thee.
4. Thou camest, O Lord, / With the living word, / That should set thy people free; / But with mocking scorn, / And with crown of thorn, / They bore thee to Calvary: / O come to my heart, Lord Jesus, / There is room in my heart for thee.
5. When the heavens shall ring, / And the angels sing / At thy coming to victory, / Let thy voice call me home, / Saying 'Yet there is room, / There is room at my side for thee; / And my heart shall rejoice, Lord Jesus, / When thou comest and callest for me.